処刑少女の 外伝

―時計少女の―

リベールにて

作者：佐藤真登

掃圖：无聊的方方

錄入：小草兒

※僅在處刑二群（901773158）分享※

　この世界で唯一、人が住まう大陸。

　その南方に広がる海洋には、霧で満ちている一帯がある。外から内部の様子をうかがうことができないほど濃密な霧が広がる面積は莫大で、大陸の国がいくつかすっぽりと収まってしまうほどだ。

　それは、かつて一つの文明を亡ぼす原因となった四つのの一つを封じ込めるためだけにつくられた霧の結界だった。

　たった一人の幼子を中心とした霧は、静かに、広く、そして重苦しく海上の世界を白く染め上げている。ただ一つの存在を閉じ込めるために、広大な海域を封じる必要があったのだ。

　事実、結界の中はおぞましくもおびただしい数の魔物によって、吐き気をもよおす生態が形成されている。海の色が赤く変わるほどの血、なくなった大地に代わる島と見まがうほどの死骸が重なっている光景は、現実のものとは思えない。

「まーままーまぁ」

　数多の魔物たちが食い合う霧の中心で、小さな幼子の声が響く。

　この霧ができてから、千年が経った。南方諸島連合と呼ばれていた国家は国土そのものが食い尽くされて消え去った。食らう獲物がいなくなり、ごくたまに入り込む外部からの獲物も取り込んで、あふれる魔物は己たちを食い合う地獄の饗宴を続けている。

　千年の孤独と蟲毒は、霧の中心にいる存在の力を高め続けた。

　霧の蠱毒の始まりとなった幼女は、歌詞のないメロディーを口ずさむ。自分を捕らえる霧に閉じ込められながらも、彼女は疑っていない。

　いつか、己が解放されることを。

　蟲毒が極まった末になるのか、外部の干渉によるものなのかはわからない。時間に干渉する術を持たない彼女が未来を事前に知ることなど、できやしない。

　それでも彼女は疑うこともなく、厭うこともなく、魂に満ちる力を高め続けていた。

　きっと、世界が彼女を封じ込めたことを、後悔するほどに。

　ざぶんざぁぶんと血肉の波が寄せては返す。この霧の中にあった海は、とっくの昔に飲み干された。点在していた島も食い尽くされた。生命も物質も浸食した末に、現実にあって『』と呼ばれる空間は魔物の巣食う異界へと変貌している。

　この世に、混沌を。

　この世に、殺戮を。

　光が差し込むことはない。霧が軋むこともない。この霧が自然に消えるのは、もう千年か、あるいは万年経っても変わらないのかもしれない。

　なに一つ変わらない白い世界で、なに一つ思いだすこともなく、彼女は彼女の日常を過ごす。

「まーままーまままー。まーままっ！」

　幼い童謡は、いまはまだ、誰に聞かれることもなく霧の中で響いていた。

　遠く、波の音が聞こえる。

　大陸最南端にある港町リベールの街並みは高低差が大きい。最も低い海上の孤島にの居住区があり、逆に最も高い丘の上に位置するのがの教会だ。

　港町からジグザグの道を上った位置にある教会からは、白い街を一望できる。

　海辺の街並みを見下ろす丘の上まで潮騒は届いていた。

「……」

　街の喧騒と海のざわめき。混じり合う二つを耳にしながら、一人の少女が教会の裏手にある墓前に立っていた。

　白い着物を身に着けた年頃の娘だ。着物の服飾様式は古代文明期から伝わるとはいえ、元は異世界の装束。あまり普及していない異色の装いは、よく目立つ。

　着る人があまりいない珍しい服装を着こなしている彼女は、墓石に手を伸ばし、汚れをぬぐう。

　この墓の下に遺体は収まっていない。基名に刻まれている人物は、遺体すらも危険な魔導素材になるとして、灰も残さず回収されてしまった。

　ほかならぬ、この墓地を管理するによって。

「マノンさん」

　自分の名を呼ぶ声に、着物の少女は振り返る。

　いつから見ていたのか。マノンの視線が藍色の神官服を身にまとった神官を捉えた。

銀縁の眼鏡をかけた、神経質そうな面立ちの女性。まだ四十代だというのにこの町のを管理する司祭に至った神官、シシリアだ。

　マノンはおっとりとした笑顔を浮かべ、会釈をする。

「お久しぶりです、シシリア司祭」

「ええ、もう半年ぶりでしょうか。お母様にご挨拶ですか？」

「はい。父がうわごとのように、母と同じ墓に入りたいなどと弱気なことを言うもので。親不孝者で恐縮ですが、久しぶりに参りました」

「……お父上のお加減は、やはり、あまりよくはないのですね」

「そうですね……」

　さて、これはとしての探りだろうか。はかりかねた会話の意図に、語尾を濁す。

　この町の名士の娘であるマノンは、彼女とも多少の親交がある。よくも悪くもにふさわしい性格をしているのがシシリアだ。

　ならば隠すこともないと、微笑みを浮かべたままマノンは墓前に視線を向ける。

「父が母と並ぶことになる日も、近いかと」

　正直な報告を受け、シシリアが沈痛な顔になる。

「ご両親のこと、さらにはリペール伯の継承。この度の心労と重責には、察するにあまりあります」

「あら。継承の重責など、わたくしが感じる必要がありますか？　親戚は、わたくしのことなど認めておりません」

　隠すまでもなく知られていることだ。マノンは自身の境遇を嘆くでもなく語る。

「若輩のうえ、生まれが生まれですから。わたくしなど、お家にとってみれば御輿以上の価値などない存在です。宗家の一人娘など恐れるに足らずと引きずり降ろさんとする者どもが大多数な有様で、わたくしがリペール伯を継げるのかどうか……ふふっ。シシリア司祭はご存じでしょう？」

　マノンが笑った。自嘲と自虐に満ちた後ろ向きな笑みだ。

「『役立たず』と言われることは日常。リベール家縁者のうちには、わたくしのことを口さがなく『混ざりもの』と呼ぶ者もいますよ」

　シシリアの目が鋭く細まった。

「そのような恥知らずを排除するのならば、私がお力になれるかと」

「はい？」

　思わぬ提案に、マノンは面食らう。

　生真面目が信条なシシリアにしては、冗談でも珍しい。マノンが驚きに顔を上げると、意外や意外。シシリアは本気の顔をしていた。

　戸惑うマノンに、シシリアは言葉を続ける。

「リベールという町にとって、これは一つの機会になりえます。この町は、少しばかり『』に傾倒しすぎている。あなたという若い世代で生まれ変わるならば、いまです」

「わたくしに恩を売ろう、と？　いけませんよ、シシリア司祭」

　がの政争に関わるなど、上品な行動ではない。まったくないことではないが、とは相互監視が基本的なスタンスだ。

「の司祭殿が、そのようなことを。癒着が疑われてしまいます。異端審問官にでも疑われたら、シシリア司祭のお立場も危ういものになりますよ？」

「『』の撲滅という名目があれば助力の理由には十分です。現状を放置しておくほうが、よほどとつながりがあるのではと思われかねません」

　予想以上にまっすぐな言葉に、マノンは面食らう。

　話のいきがかりで出たのか、それともマノンの真意を探るための引っ掛けかと思ったが、予想を覆す提案をしたシシリア司祭の視線はまっすぐだった。

「なにより、グリザリカの動きが不穏です。まだ正確な情報は入っていませんが、大規模な政変があった可能性があります。隣国の動きを受けてこの町の『』が活気づく前に、根こそぎにしたい。それが正直なところです」

「なるほど……」

　几帳面で保守的な彼女にしては性急な提案なのには、マノンも知らなかった理由があったらしい。隣国であるグリザリカに関しては、『』のメンバーが列車テロを起こしたという報告が入ってから情報が途絶えていた。

　この町のに巣食った『』の根は深い。血縁社会のは、考え方を親から子へと引き継がせる。世代を超えて思想が残ってしまうのだ。

　マノンたちの親族にしても、あからさまな違法行為はしていないが、探られていない部分ではお察しである。

　だが、この町のに生まれながらも、思想的な面でマノンは『』に感化されていない。母親が母親だったからだ。

　マノンの母親は、リベールの人間ではない。

　それどころか、この世界で生まれてすらいなかった。

「どうでしょう、マノンさん」

「そう、ですね」

　同情ではなく明確な利害が本筋ならば、納得できる。

　マノンが身内から失望とあざけりを込めて、『混ざりもの』と呼ばれる理由となったのは、彼女の母親の出生が原因だ。

　線が細く、意思が弱く、昔を懐かしんでばかりいた、母。

　彼女は異世界の日本という国からの『迷い人』だった。

　マノンは異世界人とこの世界の人間との間に生まれた子供なのだ。

「……少し、考えさせてください」

「はい。一週間ほどで、ご返答をいただけると助かります。ああ、それとこれは極秘なのですが……」

　密談の終わりにと、シシリアが何気ない世間話を振る口調で告げる。

「『』が、この町を訪れるようです」

　ざあざあん、と潮騒が響く。静かな波が寄せては返し、返しては寄せる。

「……」

　マノンは波打ち際で、足を濡らしていた。

　港町から続く一本道だけを残して孤島となっている島で、いまマノンがいる一か所だけは小さな砂浜になっている。ここを遊び場にできるのは、リベール本家筋の特権だ。他のあらゆるしがらみや権勢は打ち捨ててもいいが、この場所だけは素直に好きで、理屈の損得ではなく捨てがたいという思いがある。

　寄せては返す水の流れが、くすぐったくも気持ちいい。

　海の押し引きの力の総量は、人間のちっぽけな力などでは到底及ばない。

　けれどもこの世界には、もしかしたら一人でこの海すらも飲み干せるような力を持つ者がいる。

　純粋概念。

　この星は異世界から来る異邦人たちに、世界を変える【力】を与えたのだ。

「どうして……わたくしには、力がないのでしょうね」

　自分の無力さが恨めしい。いや、恨みに思うほどの感情すら湧かない自分の弱さが嫌になるのだ。

　シシリアからの提案から、一週間が経っていた。

　『』メノウ。

　彼女のことを――正確には彼女の師匠に対して、マノンンは少なからず感慨を覚えていた。まっとうなならば存在すら知るはずもない処刑人という立場にいる彼女たちのことを知っているくらいには、因縁を感じているのだ。

「母の仇の、弟子……」

　マノンの母親は『迷い人』だった。

　異世界にある日本という国から召喚される人々。『迷い人』は、この世界でもっとも危険でおぞましい禁忌だ。召喚された時に魂に宿る純枠概念は、徐々に精神を侵食していき記憶を蝕む。もしもまったく魔導を使わず過ごしたとしても少しずつ侵食は進行していき、最終的には必ず純粋概念を暴走させる。

　少なくとも、古代文明期が過ぎてから化せずに天寿をまっとうできた異世界人は一人としていない。

　日本という異世界の国からやってくる『迷い人』は、善良で――危険だ。

　そんな一人を、『』であるリベール家がかくまい、結婚という手段で取り込んだのは、二十年近く昔の話だ。リベール伯だった父と『迷い人』であった母との間に生まれたのがマノンで、一人娘だった彼女は跡継ぎとして育てられた。

　だが『迷い人』であった母親は、処刑人の『』に殺された。いつの間にか母を本気で愛するようになっていた父親は気力を一気に失い病にかかり、いまでは末期患者だ。

　なにもかも昔に終わったこの町に、いまさら『』がなにをしに来たのだろうか。

　話にだけ聞いている彼女の行動の目的など、マノンのあずかり知ることではない。『』の弟子であるという他には、彼女の経歴は見事に闇に隠れている。リベール家の情報網では、名前を知るので精いっぱい。グリザリカ王国にいた時でも、『』の行動が事件として騒がれることはなかった。

　彼女がグリザリカ王国から未開拓領域を超えてマノンがいる港町リベールに入ってくるのに、確たる目的はないのだろう。

「ただ、通り過ぎるだけ、ですか」

　なにか遠大な目的があって、この町にたどり着くのではない。旅の途中に立ち寄って、通り過ぎる。それだけだ。

　『』にとって、リベールとは特筆すべきもののない中継地点でしかないのだ。

　きっと、彼女はマノンという少女がいることも知らない。母を殺されたマノンが一方的に感傷に浸っているだけだ。

　彼女は『』の弟子であって『』ではない。

　異世界人であった母を殺し、マノンの無能を証明した赤黒い髪の彼女とは、違うのだ。

　しかし、どうだろうか。通り過ぎるだけでも、『』の系譜は静かな騒動を運んでくる。のシシリアはマノンに接触、の親戚たちはにわかにざわめいている。

　港町リベールで日々、変わらぬ生活をしているのは、の人々だけだ。

「……ふう」

　ため息をついたマノンは、水平線のかなた、霧が揺らめく海に視線を送る。

　海のさなかに、そそり立つような真っ白な霧の壁がある。

　『』。

　海にそそぐ大瀑布のような霧の壁は、四大のひとつだ。

　かって豊かな地だった南方諸島連合を食い尽くしたと言われる霧。世界を滅ぼせる厄災は、マノンが生まれた時から目と鼻の先にあった。

　なにか、流れ着いてこないだろうか。

　鬱屈とした日常を過ごしながら、なにもかもを台無しにしてくれるものを望んでいた。世の中をひっくり返してしまう、なにか。それさえあれば、自分の置かれている閉塞的環境が壊れてくれるのだと他人任せに祈ったことは一度や二度ではない。ある日突然、あの霧が晴れて世界が滅び始めるんじゃないかと期待した夜すらあった。

　もちろん、なにもない。

　千年の霧、災厄の跡地には、なんの変化も見られない。世界は平穏無事で、崩れようもない。終末が訪れることはなく、マノンの日常もそのままだ。虚しい願いは虚しいまま、成就することなどない。

　世はこともなく、太平を保つ。

「……やはり、そうですね」

　穏やかな波に足を浸しているうちに、不思議と決意は固まっていた。

　流されて、生きてきた。

　マノンは決して強硬な意思を持っている人間ではない。好きなことも、嫌いなことも、自分の意思で留めようとしたことがない。

　けれども今回の決意だけは、間違いなく自分のものだ。自分が生まれ育った城を見上げて、あえて決意を言葉にする。

「小娘のわたくしが、どれだけできるか――一つ、試してみましょうか」

　世界を改変できる力など、望もうとも得られるものではない。

　自分の無力さを知りながらも、マノンは浅瀬に浸していた足を動かした。

　遠くに見える『』へ背中を向け、自分が住むリベール城に立ち向かうように歩き出した。

　緑がまばらな荒野で、二人の少女が歩いていた。

　一人は神官だ。各国を渡り歩く巡礼神官らしく、その足取りに乱れはない。

　だが連れの少女は、見るからに疲弊している。自分から会話はせず、文句を言うこともなく歩いているものの、足取りは緩慢だ。

　見るからに旅慣れている神官が、メノウ。そして彼女のサポートを受けながら、なんとか歩いている少女がアカリである。

　二週間の旅で気力と体力の限界が近づいているアカリに、メノウが励ますように声をかける。

「ほら、もうちょっとよ」

「……うん」

　アカリは、うつむいたままぼそぼそと返答する。疲労困憊のいまの彼女には、なだらかな坂ですら腹立たしいのだろう。

「アカリ。顔を上げて？」

　促すと、地面ばかり見ていた視線を前に向けてくれた。

「どう？　結構いい気分になるでしょう？」

「……」

　返ってきたのは沈黙だった。アカリはすぐにうつむいてしまう。

　少し心を開いてくれたと思っていたのだが、まだまだのようだ。短期間だけ騙し通せばよかったいままでの任務とは、やはり勝手が違う。メノウは内心で肩を落としながらも、表情の明るさは保つ。

「ごめん、ここまで大変だったものね。あともう一息で休憩できるわ！」

「……うん」

　やっぱり、暗い声が返ってくる。

　疲れがたまっているのだろう。達成感が湧けば気分が晴れるかと考えていたのだが、そう単純にはいかないようだ。

　巡礼の旅は楽ではない。むしろ、過酷だと言ってもいい。

　朝早く起きて、日が高いうちに危険が潜む道を黙々と歩き、宿泊地に到着したら翌日に備えて体を洗って服を洗濯して就寝する。生活のすべてが、歩くことに費やされることになるのだ。

　文明なき道の間に点在する宿泊地は、街中にあるホテルなどとは比べものにならないほど粗末だ。慣れていなければ熟睡もままならない。そのほか、不便は山のようにある。

　だからこの道中で、メノウは必要以上に明るくアカリを構っていた。

　後ろめたさがあるのだ。

　アカリは違う世界から来た人間だ。本来だったら、二週間も野宿に近い旅などする必要はなかった。

　過酷な世界に叩き込まれてしまった彼女に、せめて、ほんの少しでも楽しんでほしい。

　殺すために連れている少女に、なぜかそんなことを願いながら、メノウは港町リベールに足を踏み入れた。

　リベールにたどり着いたメノウは、この町の教会を管理する司祭シシリアにグリザリカ王国であった事件を詳細に報告していた。

「ありがとう、メノウさん。いま、グリザリカの情報は貴重だわ」

　シシリアはメノウがグリザリカ王国で手に入れた情報の報告書に目を通す。

　古都ガルムでの一件のあと、グリザリカ王国は鎖国状態にある。の頂点にいた大司教が『』のテロリストたちと組むという異常事態だが、オーウェルの名声が無理を通すことを可能としていた。

　いまグリザリカ王国に出入りできる人間はごく僅かだ。情報のほとんどが封鎖されている。

　だからこそ、グリザリカから来たメノウは歓迎されていた。

「アーシュナ殿下への支援はできませんか？」

「……難しいわね。彼女が亡命をするというのなら受け入れたけれども、未開拓領域を挟んでしまえば、こちらからグリザリカ王国への干渉の難易度は大きく上がるわ」

　国家の間には未開拓領域が挟まっている。これがあるからこそ大きな争いが起きていないという面があれども、貿易などの国交の幅が大きく制限されているのも確かだ。この千年、文明が飛躍的に発展することがなかった大きな要因でもある。

「それでも支援はしたいわね。禁忌に堕ちたオーウェル猊下の考えが読めないのが怖いところだけれども……悪いようには、しないわ」

「ありがとうございます」

「当然のことをするまでよ。ところでメノウさん」

　細ぶちの眼鏡をかけたシシリアは、まっすぐにメノウの顔を見る。

「この町のことで、協力してほしいことがあるの。あなたの力を貸してはくれない？」

「私の、ですか？」

　メノウは思わず目をぱちくりさせる。処刑人になってから、こんな風に真正面から頼みごとをされることは少なかった。

「とある人の力になって欲しいのよ。――入ってきてください」

　入室を促す言葉とともに現れたのは、印象的な衣装をまとった少女だ。メノウはそれが日本古来の和装であることを知っていた。

「初めまして、メノウさん」

　両手を揃えて、丁寧に礼をする。その所作は育ちの良さを感じさせた。

　顔を上げた彼女は、胸に手を当てて名乗る。

「わたくしは、マノン・リベールと申します。どうぞ、よしなに」

　メノウがマノンと出会った同時刻。リベールのホテルの一室で、ベッドに腰掛けていたアカリは陰鬱と呟いた。

「また……足、引っ張っちゃったよね」

　この世界にアカリが召喚されたのが、三週間ほど前。メノウに連れられ急に前のグリザリカという国を出て、二週間あまり。

　徒歩で荒野を移動する旅の間も、メノウには迷惑をかけてばかりだった。

「メノウちゃんのことも、まだよくわからないし」

　やはり彼女が、この世界の人間であることは間違いなさそうだ。ここに来るまでの会話で知ったメノウの話を聞いて、アカリは少なからず落胆していた。

　この世界には自分と同じように『迷い人』と呼ばれる日本人がやってくるらしい。事実、アカリは異世界召喚という信じられない事態に巻き込まれている。

　だから、もしかして、と思ったのだ。

　メノウがあまりにも、突然いなくなってしまったあの子と、よく似ていたから、なにかつながりがあるかもしれない、と。

「本当に、関係ないのかな……」

　アカリが召喚された城でメノウと出会ってから、ここまで。何度も浮かんだ疑問が口からこぼれる。

　アカリの知っている彼女と、この世界で初めて出会ったメノウ。この二人が無関係とは、どうしても思えなかった。

　アカリはそれを知りたくて、ついて来ているといっても過言ではなかった。

　ベッドに腰掛けたアカリは、窓に目をやる。

「今頃、なにやってるんだろう」

　メノウの行動の大半をアカリは把握していない。

　時々、彼女はアカリを残して行動する。きっと知られたくないことがあるのだろう。メノウの隠れた行動も、アカリが彼女に心を開ききることができない理由の一つとなっていた。

　正直なところ、アカリから見たメノウは少しばかり怪しい。

　いい人だとは思う。

　親切だし、気を使ってくれているし、性格も明るい美人だ。けれども、いまいち信用しきれない。

　というか、そもそもこの世界そのものに不信感がある。アカリからしてみれば、いきなり喚び出されたのだ。二週間の旅の最中で、異世界人召喚は本来ならば自然現象として起こるものであり、人為的な召喚はそれを自分たちの手元で引き起こすための儀式だとは聞かされたものの、被害者のアカリにとっては言い訳以上の意味を持たない弁解にしか聞こえなかった。

　でも、メノウのことは嫌いではない。嫌いになれるはずがない。

　ベッドの上で枕を抱えて、うとうとと睡魔と戦いながら考える。

「わたしにできる……こと……ない、かな…………」

　巻き込まれて、流されてばかりいる自分に、なにができるのか。

　疲れに流されて、アカリはまどろみに身をまかせた。

　ホテルに戻ると、アカリはベッドに仰向けになって寝ていた。

「アカリ？」

　一応呼びかけてみたが、起きる気配はない。半開きになった口から健やかな寝息が返ってくるだけだ。

　無防備な寝顔に、ふっと表情をほころばせた。未開拓領域を歩いていた二週間は、いまのようなベッドもなく毛布に身をくるんで粗末な宿泊所の床で寝る生活をしていた。就寝環境の悪さゆえに眠りは浅かったようで、起床後も疲れが取れていないのはメノウも察しつつも、どうしようもできなかった。

　やわらかいベッドでの睡眠で、アカリは久しぶりに熟睡できているようだ。

　メノウはアカリを殺すために連れて歩いている。彼女が召喚された時に魂に定着した純粋概念は、暴走前に殺害しなくてはならないほどに危険だ。【回帰】によって蘇るアカリは、確実性の高い殺害手段が見つかるまで手を出せず、奪われるわけにもいかない爆弾のような存在だ。

　けれども、アカリは無力だ。

　純粋概念という力以外には、なにもないと言っていいほどアカリは頼りない少女だ。性格も控えめで、順応性が高いとも言えない。彼女がこの世界で生きるには、メノウに頼るほかない。

　だから、この無防備な寝顔は、メノウが守らなければならないのだ。

「……変よね」

　メノウはいままで、誰かの命を助けるために自分の力を振るったことがなかった。処刑人という立場は、人を殺す任務ばかり与えられる。

　──なぜ殺すのか。それは、私たちが悪人だからだ。

　ふと、自分を育てた『』の薫陶が脳裏によみがえる。

　正義のためでも、世界のためでも、平和のためでもない。

　人を殺す自分たちは悪人だから人を殺すのだと、メノウを育てた人はそう言った。

　の教えに従って、メノウは彼女を殺すために旅をしているというのに、アカリを殺す手段を思い付けないまま、むしろ彼女を守っている。

　自分というものを、勘違いしてしまいそうだ。

「なにをしてるのかしらね、私は」

　メノウは一息つくために、部屋に備え付けてある簡易キッチンでお湯を沸かす。素泊まりで食事は自分たちで、というホテルなのだ。

「ふぇ……」

「あら、おはよう、アカリ」

　お茶を淹れていると、匂いにつられたのかアカリが目を覚ました。

「……あ。わたし、寝ちゃってた？」

「ぐっすりと。いい夢を見れた？」

「うん……日本の夢、見てた」

　寝ぼけまなこのアカリが、メノウからマグカップを受け取る。

　日本の夢、と言われてメノウは一瞬、視線を逸らしてしまった。メノウが召喚したわけでないにしても、異世界人召喚に関しての後ろめたさは付きまとう。

　だから不覚にも見逃した。

　マグカップを受け取った直後に、アカリの体がうっすらと導力光を帯びたことを。

「帰りたいなぁ」

　誰に聞かせるためでもなく、寝起きだからこそ出たアカリの本音。周囲の人に迷惑をかけないようにと無意識に押さえつけていた自制心が取り払われ、心から素直になった感情に、彼女の魂に不正定着した純粋概念が反応した。

『導力：接続──筝?罩　?絎???純粋概念【時】──発動：【??化】』

　アカリが受け取ったマグカップが、砂となって崩れ落ちた。

「へ？」

「ッ⁉」

アカリが目を丸くして、メノウが息を呑む。マグカップだったものはざあっと音を立ててアカリの膝上に散らばり、中にある飲み物も気化して消え去っている。

「え、え⁉　な、なにこれ！」

　アカリの反応はパニックに近かった。自分が原因だと自覚のない彼女は、顔を真っ青にしている。

　だがメノウの焦りはそれ以上だ。

「これ、は」

　純粋概念が、漏れている。

　ここに来るまでの疲労、慣れない環境への不信感。いくつかの要素が重なって精神が圧迫された上に、引き金となったのは直前で見ていた夢だろう。純粋概念のタガが緩んでいる。

　導力光が、渦巻いている。アカリの焦燥に呼応して、ゆがんだ形の時計をつくっている。

　普通ならば長期の訓練と道具を使わなければ発動するはずがない魔導を、異世界人は本能的に行使できる。魔導的な才能がこの世界の人間とは比べるまでもなく優れている点ではあるが、優れているがゆえの弊害が目の前に現れていた。

　本能的に魔導を行使できるがゆえに、いまのアカリは意識すらせずに魔導現象を引き起こしてしまっている。

「アカリ、ごめんッ」

　純粋概念に人格を呑み込まれて発生するとは違い、小規模な魔導を発動させてしまう暴発だ。しかしアカリが行使するのはただの魔導ではない。【時】の純粋概念由来のものである。

　このままでは、なにが起こるかわかったものではない。メノウは、アカリの手を掴む。

『導力：接続──トキトウ・アカリ──』

　接触した部分から、導力を通した。

「いいッ⁉」

　びくん、とアカリが背筋をのけぞらせる。

　人体の相互接続は、痛みを伴う。精神が他人の導力に拒否反応を起こし、常人では耐えきれない痛みを発生させるのだ。よほどの信頼関係があれば無痛に近い導力接続も可能だが、出会って一か月も経っていないメノウとアカリの間にそこまでの関係は望むべくもない。

　だが手段を選んでいられる事態ではない。

　痛みのせいか、アカリがメノウとつないだ手を振り払おうとしているが、離すわけにはいかない。メノウにもアカリに気を使える余裕はなかった。

「――こ、のぉッ！」

　肉体を通し、反発する精神を経由して手触りを感じた、アカリの魂に潜む純粋概念。巨大すぎる気配に、ぐらりと平衡感覚を失う。

　危うく呑み込まれかけながらも、持ち直した。魂には触れずに、導力操作をして、発動しかけた魔導構成に介入して霧散させる。

　導力接続をしていた時間は短かったが、痛みに耐えきれなかったのかアカリは意識を飛ばしていた。

　メノウはベッドにアカリを寝かせて、大きく息をついた。

「あれが、純粋概念……」

　改めて、異世界人の危険性を実感した。特に接続した時に感じた、純粋概念の得体の知れなさ。今回のように漏れ出した魔導構成を散らすだけならばなんとかなるが、それ以上となれば、メノウの精神が保たない可能性が高い。

　メノウが特異体質で痛みなく導力の人体接続を行えるとはいえ、接続の深度を見誤れば純粋概念に精神を呑まれて終わりだ。そもそもアカリのはうには激痛が走るのだから、こんなことを何度も繰り返すわけにはいかない。

　力が大きすぎれば、持ち主の善悪など関係なくなるのだ。

「……大問題ね、これは」

　この町で解決すべき問題は『』のことだけではすまなそうだった。

　ホテルでの顛末をシシリアに報告すると、彼女は教会の祭壇通信での連絡を約束してくれた。地脈を通してつながる祭壇の通信網は、国を超えてつながる数少ない連絡手段となっている。

　アカリの不安定さと不死性について、から対処法を募ったのだ。メノウはアカリに純粋概念をほとんど使わせていない。と化すまでの時間はまだあるだろうが、先ほどのようなことがあれば不測の事態に陥る可能性があった。

　それゆえに、自分より経験が蓄積されている『』そのものに対処法を求めたのだ。

　とはいえ、有効な答えを得るまで時間がかかるだろう。

「せんぱぁーい！」

　小腹も空いたし、市場にでも行くかと外に出ると、当然のようにメノウの居場所を突きとめた後輩が姿を現した。

　改造を施した白服を着た神官の少女、モモである。

　いつもと変わらない彼女を見て、ほっと肩の力が抜けた。

　自分でも自覚しないうちに気を張っていたらしい。メノウは微苦笑しながらも、モモの頭を撫でる。

「先に着いていたのね。巡礼路なしで未開拓領域を突っ切ったの？　アカリに見つからないためとはいえ、お疲れさまね、モモ」

「なんてことありませんー！　モモは先輩のためなら、元気百倍なんですぅ！」

「よしよし、モモが優秀で私も嬉しいわ」

「えへへー、それほどでもぉ、ありますけどー！」

「うんうん。モモがいないと私なんてダメダメよ」

　すりすりと寄ってくるモモをひとしきり褒め倒したメノウは、すっと手を離す。

「さて、モモ。仕事の話よ」

「ええ……」

　話題の転換にモモがあからさまに不満な顔をしたが、スルーだ。そのまま歩きながら、喧騒あふれる港の市場に突入して会話を続ける。

「今回の依頼はリベール伯継承問題の解決に向けた助力だそうよ」

「いいですけどぉ。でも、前回のガルムの時は大変でしたしぃ？　ご褒美というかぁ、なにかテンションが上がることがないとやる気が出ないというかぁ」

「あのねぇ、モモ。ことは『』に関わるの。主に仕えるとして、示しをつけなきゃいけないところよ」

「どーせモモは主への信仰値なんて底辺ですぅ。もっと実益が欲しいですー！」

　不貞腐れているモモに今回のことの重要性を言い聞かせるも反応が鈍い。

　ならばとモモの言う『実益』を満たすため、メノウは会話の途中で目についた果物屋の屋台でスイカを一つ購入する。

「はい、モモ。あーん」

「あーん！」

　メノウがスイカを差し出すと、モモが飛びついた。我ながらどうだろうとちょっと思っていた機嫌の取りかただったが、モモの表情は幸せそのものだった。

「えへへー。おいしいですぅ！　先輩の手ずからのご褒美のおかげで、やる気が補充されてきましたー！　……もう一回お願いしていいですかー？」  
「ええ、いいわょー」

　簡単に機嫌を直してくれる後輩で助かると、メノウはもう一つ、スイカを購入してモモに差し出す。おいしそうに食べる後輩の顔を見ると、アカリへお土産に買って行こうかという案が浮かんだ。

　なにせ、緊急事態だったとはいえ痛みで気絶させてしまった後である。確かこの果物の命名の由来も日本だったし、アカリと話を弾ませるネタになるかもしれないと持ち帰りに購入する。

「それでぇ。モモはなにをすればいいんですかー？」

「そうね。これといって差し迫った要件はまだないんだけど……」

　しゃくしゃくとスイカを食べながらのモモの質問に、メノウは視線を海の方向に走らせる。

　海際から一本道だけで陸地につながっているリベール城が見えた。

「これからの、話し合い次第ね」

　今日の夜。シシリアから紹介された少女、マノン・リベールと会う約束をしていた。

　リベールにあるの居住区。リベール城がそびえる孤島への潜入の難関は、島に入るまでだ。

　海上に浮かぶ島へつながっている道は、一本だけだ。孤島の周辺は城壁と断崖が一体化している構造なので、海からの侵入は難しい。導力強化で身体能力を上げると、どうしても導力光の燐光が目立ってしまうし、警護の人間もそれを一番の目印にしている。

　夜というのは厄介で、導力強化に頼っている人間ほど選択肢が減ってしまうのだ。

　そんなリベール城に、メノウは潜入してくるように言われた。

　他でもない、今日の昼に出会った少女、マノン・リペールからだ。

　メノウが選んだ潜入手段は、他の人間ではまねできないものだった。

　導力迷彩によって、正面から入った。

　魂から発生する導力で肉体性能を上げる、導力強化。その際に発生する導力光の色を操作して身にまとうことで、人の視覚を欺く技術だ。これを習得すれば、服装の変化はもちろん、まったくの別人に化けることもできる。

　メノウの育て親にして師匠である『』が開発した特殊技術である。あまりに特異な導力操作技術が要求されるために、導力迷彩を実戦レベルで使えるのはメノウと『』くらいだ。むしろ、メノウがこの技術を習得したからこそ、『』と呼ばれるようになったと言ってもいい。

　周囲に姿を紛らわせることで警備の目をかいくぐったメノウは、マノンが待っている部屋に向かう。室内の廊下からだと人目につく可能性があるため、外壁にあるベランダに侵入して、事前に打ち合わせた回数、窓を叩く。

　内側の鍵が開く音がした。

「どうぞ」

　マノンだ。あっさりと城内に侵入したメノウに驚くわけでもなく、柔和な笑みを浮かべている。

「待たせてしまいましたね。力試しに私を潜入させたと思うのですが、お眼鏡にはかないましたでしょうか」

「もちろんです。それと、メノウさん。敬語はやめてください。年も近いですし、普段の口調で結構です」

「そう？」

　メノウはあっさりと口調を砕けたものにする。今回の協力者だ。親しくして損はないだろうという判断である。

「その割には、あなたは敬語じゃない」

「わたくしは、これが普通ですのでお気になさらないでください」

　メノウが入ると、乾いた人のにおいがした。

　においのもとに目を向けると、やつれた男性が寝台に横たわっていた。事前に調べた情報によれば五十代はじめだったはずだが、それよりもはるかに年配に見える。

「彼が……」

「ええ、父です」

　リベール伯爵家の現当主だ。容体がすぐれないという噂は過少なものだったようだ。

　明らかに、末期である。

　回復の見込みはないだろうと、医療には疎いメノウの目からですら明らかだった。リベール伯の病状に嘘はないと、マノンへと視線を戻す。

「それにしても、メノウさんはすごいですね。それなりの警備がいるはずですが、あっさり侵入されてしまいました。の身としては、少しばかり恐ろしく感じてしまいます」

「あなたに警備の情報はもらっているし、こういうのには慣れているのよ。それに、私はでも特殊なほうよ。……リペール伯の容体は？」

「あと一週間は、もたないでしょうね」

「そう」

　メノウは目を伏せる。

　もはや回復の見込みもないから、最期は自宅でとなったのだろう。

　父親の死と同時に、リベール伯の継承問題は本格化する。

　同時にの問題も表面化するだろう。シシリア司祭は、そこを狙い撃ちしてこの町にはびこった『』を処理するためにマノンに協力しているのだ。

「リベール伯のご令嬢を手伝えだなんて、不思議な話ね」

「そうでしょうか。もっととは、身分の垣根を越えて協力することがあってもいいと思います」

　一瞬、グリザリカ王国で別れたアーシュナの顔が脳裏をよぎった。メノウは彼女の力になることはできなかった。

「安定のための分断だもの。私たちは世界の安定を維持させるために存在しているのよ。けど……本当に世界を変えることができるのは、でしょうね」

　聖職者のと王侯貴族のは権勢がある分、きつく動きを縛られている。現状の維持しかできないようになっている。

　変革の権利を持っているのは、民衆であるだけだ。

「そうですね。おっしゃる通りです。達見ですね、メノウさんは」

「ありがとう」

　お世辞に、ひょいと肩をすくめる。

「それよりも、リベール伯継承関連で荒れる親族への対応や味方の心当たりはあるの？　残念ながら私はの政争には疎いわよ」

「はい。ご心配なく」

　身内を追いやる相談に、マノンは迷わず積極的な案を出す。

「政争というものは、足の引っ張り合いと味方へ与える利益の確保です。継承戦に際してわたくしが有利な点は二つ。直系の娘であること、そしてシシリア司祭が後ろ盾となってくださっていることです」

　利益については、マノンがリベール伯になれれば提供できる部分だ。マノンに勝ち目があると思えば、勝ち馬に乗ろうと味方に付くものはいるだろう。

「この一つ、シシリア司祭の後ろ盾については、近々あるわたくしの顔見せの夜会で知らしめます」

「そこに私の出番はないわね」

「はい。メノウさんには、その隙に町はずれの洋館に侵入していただけませんでしょうか」

「洋館？」

「まあ、なんといいますか……親戚たちが悪だくみをする時に使っている拠点です」

　なるほど、と頷く。が独自の魔導研究をしているのも、それが禁忌に片足を突っ込む領域に行くのもよくある話である。彼らは他者を――特に、を出し抜きたいという欲望を持つ傾向にあるのだ。

「取り急ぎ、相手の失点を暴いていただけると助かります。証拠さえあれば、騎士の方々にも動いてもらえますので」

「わかりやすくていいわね。屋敷の警備がどうなっているか、わかる？」

「残念ながらそこまでは……一応、見取り図だけは写しを控えてあります」

　マノンが屋敷の見取り図を渡す。あからさまに怪しい地下室まで記載されているあたり、十分な情報である。

「それと、こちらは『』に深く関わっている人員のリストです。シシリア司祭にもお渡ししていますが、念のためご確認ください」

「……ずいぶんな数が『』に浸ってるわね。これだけ人が抜けて、行政の運営は大丈夫なの？」

「なるようになりますよ。騎士の方々だけはシシリア司祭の尽力でほとんど『』の思想を受け付けていませんし……あと、町のほうに、わたくしと同世代のの方々がいるんです。『』にかぶれた親兄弟の空気に嫌気が差した方々ですね」

「それが？」

　メノウにも情報は入っている。とは言っても傍流で、若さを持て余して悪目立ちをしている素行のよろしくない連中だ。

　そんな輩をどう使うのだという問いに、マノンは、にこっと笑う。

「よく町の運営に文句を言っていた血気盛んな方々ですので、この町を変える機会があれば馬車馬のごとく働いてくれるに違いありません」

「それは……いい案ね」

　メノウに政治はわからないが、目の前の少女のしたたかさは知れた。なかなかいい根性をしたこのお嬢さまならきっとうまくやるだろうと苦笑してから思いつく。

「そうだ、マノン」

「なんですか？」

「よければ、さっき言っていた夜会の招待状をもらえる？」

　メノウの要求を聞いて、マノンは不思議そうに小首を傾げた。

　しゃっとカーテンレールが動く音とともに、試着室の中にいたアカリは自分のドレス姿をお披露目した。

　肩にフリルをあしらった、ふわりとしたデザインのかわいらしいドレスだ。十六歳にしてはやや幼く見える童顔と発育のよい体型にマッチしたアカリのドレス姿を見て、メノウが賞賛を贈ってくる。

「うん、これも似合っているわね！　スタイルがいいからかしら。ドレスが似合うわね、アカリは！」

「え、と……メノウちゃん」

「なに？」

　惜しみなく褒められたアカリはといえば、喜ぶ余裕などない。おそるおそる、自分をここに連れてきたメノウに問いかける。

「これ、なに？」

　ここはリベールの街中にある服飾店である。

　ホテルにいたアカリはメノウに引っ張られてここに来たのだ。メノウはアカリを連れて来るなり、ドレスを見繕ってのファッションショーを始めた。アカリとて着飾るのが嫌いというわけではないし、かわいい服を着れば嬉しくもなるが、あまりにも唐突だったため心が付いて行っていない。こんなせわしなく連れまわされるくらいだったら、お風呂でゆっくりしたいというのがアカリの希望だった。

　そんなアカリの気持ちを知ってか知らでか、メノウは服屋の窓を指さす。

「あそこ、お城が見えるじゃない」

「う、うん」

　窓ガラスの向こうには、海の上に立っているかのような綺麗なお城が見える。日本にいた頃ならば海外旅行にでも行かなければお目にかかれない立派な城だ。

　それがなんだろうと言葉を待っていると、メノウは予想外の提案をしてきた。

「あそこでパーティーをやるから、ぜひ楽しんできて欲しいの」

「ば、パーティー⁉」

「ええ、そうよ。今回の夜会を主催する人と、ちょっとした知り合いでね。招待状をもらったの」

　そんなの初耳だと声を上げるアカリに、メノウは便せんを取り出して説明をする。

「日本でも、こんな機会はそうそうないでしょう？　アカリの魔導を止める時にかなり痛い思いをさせちゃったし、贅沢して楽しんできて欲しいの」

「そ、それは……そうなの？」

「ええ、そうなの」

　いきなりの提案にうろたえて、アカリはわたわたと視線を行ったり来たりさせてしまう。メノウの行動は、アカリにとっては突然であることが多い。今回にしても、そうだ。

　確かに、魔導とやらの暴発を起こしてメノウに止めてもらった時は、もう二度と体験したくないと思うほどに痛かった。あの後に真摯な謝罪をされたが、実はいまのアカリはメノウから手を伸ばされるとびくついてしまう。軽いトラウマになるほど痛かったのだ。

　そのお詫びにというのはわからないでもないが、お城で夜会となるとアカリにとっても未知の領域だ。それに、ああいうお城に住んでいるのは、アカリを召喚したのと同じ『』という人たちだと聞いた。アカリを召喚したグリザリカ王国とは違う国に来たとはいえ、あっさりと割り切れるものではない。

　ちらりと甘えるように上目づかいになる。

「メノウちゃんも、一緒にパーティーに出てくれるんだよね」

「ごめんね。私は少し用があって外さないといけないの。一人であなたをここに置いて行くのも悪いから、それもあって、アカリにはその夜会に参加してほしいのよ。私が留守の間、退屈しないようにって思ったの」

「え、ええ……無理、無理だよぉ……」

　まさかのメノウが不参加と聞いて、アカリは弱々しく首を振る。確かにここから見えるお城は素敵だが、知らない場所に一人でパーティーに参加など、気乗りできるわけがない。瞳を潤ませて、一人での行動は心細いと訴える。

　だがメノウの返答は無責任なほどに明るく無慈悲だった。

「だいじょーぶよ！　着飾って綺麗になったアカリは、どこからどう見ても立派なレディだもの！　私が保証するから楽しんできなさいな！」

「うぇえ……」

　能天気に聞こえる後押しを断ることもできず、アカリはうめき声を上げる。

　実のところ、メノウが能天気さを装ってアカリの夜会参加を強行しているのには理由がある。メノウはマノンから調査依頼を受けている。その最中、どうしてもアカリが無防備になってしまう。この夜会に参加してもらえれば、こっそりと参加するようお願いしたモモに影から護衛を頼める。

　だが、そんなことを知る由もないアカリは、きっぱり拒否することはできずとも簡単には頷けない。

「で、でも、わたしにドレスなんて、どうせ似合わないし……」  
「そんなことないわよ。すっごく似合ってた。どこからどう見ても、素敵な女の子だったわ」

　メノウは両手でアカリの手を取る。

　あの時の痛みを思い出して、びくりと体が固まってしまう。メノウは一瞬、アカリの防衛反応に不思議そうな顔をしてから、理由に気が付いて申し訳なさげに眉根を寄せた。

「あの魔導現象を止めるには他に手段がなかったけど、本当にごめんなさい。でも、楽しんで来て欲しいのは、本当なの。だから、自信を持って。とってもかわいいわよ」

　とびきりの笑顔を向けられたアカリが、言葉に詰まる。

　アカリがよく知っている笑顔といまのメノウの笑顔が、重なった。

　こうなると、アカリは本格的にメノウの言葉を断れない。そもそもアカリがメノウを怪しみながらも一緒に旅をできている理由は、これなのだ。

　それでも一言だけ、諦め悪く抵抗する。

「でも……メノウちゃん、お金、ないでしょ。このドレス、買えるの？」

「…………………………振り絞れば、レンタルくらいは、なんとかなるわ」

「そっかぁ……レンタルかぁ……」

　そっと目を逸らしながらも言い切ったメノウの正直さに免じて、アカリはしぶしぶながら折れてあげることにした。

　らしいきらびやかさが、たまに、たまらなく滑稽に思える時がある。

「……ふう」

　入れ代わり立ち代わりやってくる来客を捌いて空いたわずかな間。扇で隠した口元で息を吐き、マノンはグラスを手に取って喉を潤す。

　目に映るのは華美な造りのダンスホールに装飾品。豪勢な食事は舌を満足させ、音楽隊を呼んでの生演奏が耳を楽しませ、来賓のつける香水の上品な匂いが鼻をくすぐる。

　権勢を見せつけるために五感を刺激するすべてが、くだらない。

　なによりもくだらないのは、これらを享受して育った分際で、そんなことを思う自分自身の存在だ。

「いらぬことを考えていらっしゃるようですね、リベール伯代行」

　虚を衝かれた台詞に、ぴくりとマノンの表情が反応する。

　話しかけてきたのは今日の本命だ。手に持ったグラスをウェイターに預けて、両手を体の前で揃える。

「ようこそいらっしゃいませ、シシリア司祭」

「はい。近々のリペール伯の継承の際にも、お呼びください」

「もちろんです。わたくしとシシリア司祭の間柄ですもの。ぜひとも招待させてください」

　二人の親し気な様子に、会場の視線が集まる。この町ののトップとの本家の娘の会話だ。リペール伯継承が分家と本家の間でごたつくと予想されていた中でのシシリア司祭の参入となれば、明確な潮目の変化である。耳目を集めるには十分だろう。

　如才なく会話をしながら、マノンはメノウのことを思い出していた。

　先日の寝室での会話の通り、彼女がいま頃親族の不正を暴いてくれているのだろうと思うと痛快だ。

　この夜会にいるのは、ほとんどがリベールの町に住む人々だ。

　だというのに、参加者の中でマノンが知らない人が、二人いた。

　一人は桃色の髪をした少女。かわいらしいドレスを着た彼女は不機嫌そうに壁の花となっている。どこぞのご令嬢といった風情だが、この街の有力者の子女ならばマノンが知らないはずもない。

「メノウさんの補佐官さんでしょうか。かわいらしい方ですね」

　状況証拠だけであっさりとモモの正体を見抜いて、もう一人に目を向ける。

　こちらもかわいらしいドレスを着た、黒髪黒目の少女だ。少し童顔で身長は平均的ながらも、同性のマノンですら視線がつられてしまうほど胸が大きい。彼女は少し居心地悪そうにしながらも、パーティーの光景に目を奪われている。誰かに話しかけることはできずにいるようだが、着飾った人間が集まる風景自体が珍しいと周囲をうかがっている。

　シシリア司祭に紹介してもらった日に、マノンは彼女の姿を教会の窓から目にしていた。

　メノウがリベールに来た日に連れていた少女と、間違いなく同一人物だ。

「あの方、は」

　もしかして、と胸がうずいた。夜のような瞳をしている少女だった。幼い頃に、よく見上げていた瞳の色だった。

　マノンは何気なく、シシリア司祭に問いかける。

「メノウさんは……ずいぶんと、かわいらしい方を連れていらっしゃるようですね」

「そうですね。あの少女を連れているのも、メノウさんの役目の一環ですから」

「役目、ですか」

　意外なことに、マノンの鎌かけにシシリアはあっさりと乗った。

　メノウと一緒にいた少女は神官でもなければ、犯罪者にも見えない。処刑人である彼女が、友人を連れて歩くような旅をしているはずもない。

　そんなちぐはぐな少女がなんなのか。思い当たる存在が一つ、マノンにはあった。

「……」

　黒髪も、黒目も、この大陸に住まう人々の中では決して珍しいものではない。

　だが、それでも彼女の正体を確信できたのは、自分の体に流れる血の半分がささやいたからだろうか。

「あの方のお名前は？」

「あの子の、ですか」

　シシリアは隠すことでもないと、あっさり――もしくは試すように返答する。

「トキトウ・アカリという名前だそうですよ」

「アカリさん、ですか……」

　自分で思っていた以上に、感慨深い声が出た。

　彼女を見た時に、マノンは直感していた。

　アカリは、きっとマノンの母親と同じだ。そんな彼女が『』と一緒にいる。

　想いにふけるマノンを、シシリアが横目で観察する。

「それが、どうかされました、マノンさん」

「いいえ？　この町の人ではないでしょう。ですから、少し気になりまして」

　マノンは扇を口元に当ててほほ笑む。

「ただの、好奇心です」

　マノンがアカリに近づくことはなく、参加者を騒がせる事件など起きず、夜会はしめやかに終了した。アカリの護衛のためにひっそりと参加していたモモがなにかしらの行動を起こす必要もなく、予定通りの平和なパーティーでシシリア司祭とマノン・リベールが会話をしている姿は、夜会に参加していた面々に大きな印象を与えることとなった。

　リベール城で夜会が行われるまで、メノウがやることは少なかった。

　特別なことがあるとすればアカリを『』に入れようと殺害を試みたくらいなものだが、それも失敗に終わった。気晴らしに外に連れ出して海に出ようと思ったのだが、アカリがホテルから出たがらなかったのだ。純粋概念の暴発があった手前、メノウも無理強いすることはできずに、『』に入れればアカリを確殺できるという確信もなかったため、その殺害方法は先送りにした。

　そして夜会のある日。モモにアカリの警護を任せて侵入に向かった屋敷の警備はザルと言ってもよかった。

　モモならば単身で壊滅させたかもしれないが、メノウは潜入のほうが得意だ。要所で導力迷彩を使って誰にも気が付かれることなく入り込み、書類を漁っているうちに目的のものを発見できた。

「なるほど……技術規制の禁忌は、いくつか研究しているのね」

　が占有している魔導の技術開発をいくつか行っているようだ。人体を生贄にさえすれば手っ取り早く成果が得られる原罪概念には手を出していないあたりは、ぎりぎりで理性を保っていると評価するべきか、しょせんは小悪党だというべきかは迷いどころだ。

　小粒な禁忌が並ぶなか、ひときわ目を引く魔導研究があった。

「『』……」

　メノウは小さく呟く。

　ここにある中でも特に目をひいたのは『』に関わることだった。どうやら四大を閉じ込める結界を解析して解除しようという実験が行われているようだ。

「……無駄なことをするわね」

　リベールのどこからでも見える巨大な霧は、でも干渉不可の結界だ。がいくら研究したところで、無駄な結果に終わるのは目に見えている。

　だが危険な行為には変わりない。万が一にも四大を閉じ込めている結界にほころびができれば、どれほどの被害が生まれるか予想もつかないのだ。

「本当に『』はロクなことをしないのよね……」

　ブツブツいいながらメノウは教典魔導で書類を記録していく。

　証拠は集まった。あとはマノン次第だ。

「うまくいくといいんだけど、ね」

　小さく呟いて、証拠を集め終えたメノウは屋敷からの脱出経路をたどった。

　その日の夜、誰にも気が付かれないうちに情報は抜き取られることになった。

　孤島に立つリベール城の一室。

　リベール家の中でも親族の中枢として偉ぶっている長卓に座る『』の面々は、顔を青ざめさせていた。

　『』の対策をすると集められた会議の場で、突然、マノンが悪事の証拠を机に広げ始めたのだ。それと同時に、騎士たちが部屋になだれ込むおまけつきである。

「き、貴様ら！　誰の許可を得て――」

「わたくしが許しました」

　果敢にも騎士に向かって声を上げた老人を遮って、マノンが静かに告げる。

「リベール家直系であるわたくしの許しの他、この城に入るために誰の許可が必要ですか？」

　老人がぐっと言葉に詰まる。彼の後ろにも騎士がすでに立っている。

「な、なんのつもりだ、小娘ッ。こんなことをして……リベール家をに売り渡すのと同義だぞ！　育ててやった恩すらも忘れたか！」

「そんなことを言われましても。生きていてもいいことがなかったので、あなた方に恩を感じたことはありません」

　あまりにも自然に『生きていてもいいことがなかった』と答えたマノンの発言に、リベール家の人間はもちろん、味方である騎士すらもぎょっとした。

　凍りついた空気の中、おっとりとしたマノンの声が響く。

「なんにしても、あなた方の行く末は二つに一つです。大人しく勧告に従うか、歯向かって痛い目を見るか」

　マノンは口元に閉じた扇を寄せて、親戚連中に向かってたおやかにほほ笑む。

「どうぞ、いまお決めください」

　リベール家にいた『』参加メンバーはほとんどが捕らえられた。

　メノウから事の顛末を聞いたモモが思ったのは、『やたらと順調に終わったな』ということだった。メノウの補佐官としてモモが直面してきた事件の中でもトップレベルで順調だったと断言できるほど、リベールの『』はあまりにもあっさりと壊滅した。

「今回は楽な仕事でしたねー」

「そうね。ここまで順調なのは、そんなに経験がないわ。シシリア司祭が有能だったのよ」

　モモはメノウと顔を合わせていた。メノウがシシリアから頼まれた仕事が終わったので、これからの打ち合わせをしているのだ。

　アカリの護衛の他に特にすることもなかったモモにとっては、肩透かしだった。

「『』の処理で一番困るのはの反発だけど、今回は協力者がいたのが大きかったんでしょうね」

「マノン・リベール、でしたっけ？　この町の司祭がうまく協力者に引き込んだのが利いたんですねぇ」

「事前の準備が周到なのよね。滅多にいないくらいちゃんとした司祭よ、あの人」

「あー……確かに、珍しく騎士の奴らと連携とれてますもんねぇ。『』思想にかぶれてる連中を捕らえるためだって言っても、普通、あんな簡単にのいうことなんて聞いてくれないんですけどねー」

　治安維持のためにいる騎士たちとはいえ、彼らはから選出されている。普通ならばを捕縛する作戦をから聞かされて騎士たちが協力的になることは稀だ。

　だというのに、シシリアの計画に騎士たちが異論をはさんだ様子はない。強権を恐れているわけではなく、信頼関係ゆえの協力体制が築けているというのだから驚きだ。

　裏で動いたメノウと表立ったマノンの行動はあれど、今回リペールの『』捕縛に関しては、一連の流れの絵図を描いたシシリアの優秀さが目立つ。

　だが、モモにとってはこんな田舎町がどうなろうが知ったことではない。

「あとは、あの異世界女への対処法待ちですねー。純粋概念の暴発でしたっけぇ？　一か月もしないうちにホームシックこじらせるなんて、メンタル脆いですよねー」

「そう言わないの」

　メノウの言葉を聞いて、モモはわずかに眉を顰めた。

　モモが敬愛する先輩であるメノウは、ほとんど無意識にアカリをかばっていた。異世界人は危険だからというたしなめではなく、アカリという人物そのものに気を払っている。小さなことではあるが、それがモモにある疑念を抱かせた。

　いままでモモは、メノウが連れている『迷い人』トキトウ・アカリを大して注視していなかった。一見して引っ込み思案であり、あからさまにキョドキョドとしている彼女がメノウとのコミュニケーションを築けるとは思っていなかったからだ。メノウが他人に影響されやすいとはいえ、ロクな会話もおぼつかない人物に数日でほだされるほどではない。

　だが、当初の予想を超えてメノウとアカリは長く旅をすることになってしまった。

　もしかしたら、メノウがアカリとの距離を見誤り、過度な感情移入をしてしまいかねないほどに。

「先輩……」

「ん？　なに？」

　まだ、旅は続くだろう。

　だからモモは、にこりと笑った裏側で考え始めた。もしアカリが、もっとぐいぐいと距離を詰める性格だったら、モモはもっと早くさっきの危惧を抱いていただろう。気が付くのに遅れてしまったと痛恨の念を抱きながらも、モモの大好きな先輩を守るためにはどうすべきか、メノウに気が付かれないように思考を回す。

　だって、この指摘をしてしまった場合――逆に、メノウがアカリのことを意識しすぎてしまう恐れがある。

「なんでもありませんー！　これからも、モモになーんでも頼んでくださいねー！」

　だからモモは、メノウに指摘しない。アカリに感情移入しているのでは、と。彼女に友情を感じてしまったらどうするのだ、と。

「ええ、頼りにさせてもらうわよ」

「えへへー、頼りにされちゃいましたぁ！」

　なにも言わないまま、いざとなれば、自分がアカリを殺す決意を固める。

　モモは、メノウを守るためならば誰とだって戦うし、誰だって殺せるのだから。

　モモとの打ち合わせの後、メノウはマノンに会いにリベール城を訪問していた。

　前回のような侵入ではなく、マノンから正式に招かれている。正門から姿を隠すことなくリベール城に入ったメノウは、最初にマノンと打ち合わせをしたリペール伯の部屋を訪れていた。

　ここに来るまで、城内は閑散としていた。使用人もどこか肩身を狭くしている。

　城主が身内を切り捨てた後なのだ。雰囲気が悪くて当然だ。

「お招き、ありがとう。から招待されることなんてめったにないから新鮮だわ」

「メノウさんは功労者ですから、お礼を申し上げるのはこちらのほうです。来てくださってありがとうございます」

「私は大したことはしてないわ。今回の功労者はシシリア司祭よ」

「もちろん、彼女にも改めてお礼はしに行きます。ですがいま目の前にいるのはメノウさんですから」

　いつも通りの着物姿であるマノンは両手を前にして、深々と腰を折る。

「リベール家の騒動にご尽力いただき、誠にありがとうございます。リベール伯爵家の継承問題も片付さ、父も憂いなく逝けるでしょう」

「……そう。リベール伯は、やっぱり？」

「医師からは、もうすぐだと」

　顔を上げたマノンの返答に、メノウは寝台に眠る男性へ目を向けた。

　前回見た時より死の気配が近く、全身の輪郭が儚く見えるほどに枯れ果てながら、どこか穏やかな姿でもあった。

「メノウさん。よろしければ、父の手を握っていただけませんか」

「私が？　それはまた、どうして？」

「はい。父が壮健だった頃はとは反目していましたが……いまの状況を見れば、神官への礼を言いたいと思いますので」

　そういうものだろうかと首をひねりつつも、親の死に目を前にした子供の思いである。メノウには縁のない感情だが、無下にするのも角が立つ。誰であっても体温を分けて欲しいのかもしれないと、左手に抱えていた教典を脇に置いてリベール伯の手を握る。

かさついた肌の感触は少しでも力を入れれば砕けてしまいそうだった。

　ふと、思う。

　メノウは、自然死に近い人に触れたことは、なかった。

　これもまた、人の死だ。病気に蝕まれて、体が弱って、死ぬ。温かい血潮をまき散らす激しさとは真逆の死の感触は、ある種の新鮮さをメノウにもたらした。

　人は、こんな風に静かで穏やかな最期を迎えることもあるのだ。

「メノウさんは……わたくしの身の上をご存じですか？」

「リベール家のご令嬢でしょう」

　マノンの声は、背後から聞こえた。

　メノウは、徐々に弱まっていくリペール伯の脈を感じながら答える。

「それだけ、ですか」

「もうすぐリベール伯になるわね」

　一歩、近づく気配がある。

　だがメノウは、いままさに命が消えようとするリベール伯の気配に気をとられていた。

　ただでさえ弱い脈が、一拍ごとに弱くなる。呼吸の音が消えていく。生きる力が抜け落ちる。

「他には、どうでしょう」

「他に、なにかあるの？」

　メノウは、上の空で返答する。

　まったくの他人の死に、ここまで気を取られたのははじめてかもしれない。メノウは自分がはじめて目にする、人為的な最期ではない死を迎えるリベール伯の命を見届けるため、彼の手を取り続ける。

「ありますよ」

　リベール伯の脈が、止まった。

　あ、とメノウの吐息が漏れる。マノンにリベール伯の死亡を伝えようと振り返ったメノウが見たものは、鉄扇を振り上げるマノンだった。

　メノウの頭を砕く勢いで、凶器が振り下ろされる。

　リベール伯の手を握ったメノウの両手がふさがっている。避けることもできない完全な不意打ちだ。

　だが、肉を打つ音はしなかった。

　ぎぃと金属が硬いものを弾く音が響いた。

マノンがメノウの背後に忍び寄って振り下ろした一撃は、【障壁】によって防がれていた。

渾身の一撃を防がれたマノンが目を丸くしている。

「ああ……不意打ちも、通じませんか」

「シシリア司祭から助言されていたわ」

神官服の魔導を発動させたメノウに焦りはない。マノンに鋭い視線を向けたまま吐き捨てる。

「あなたは『』でこそないけれど、危険思想の疑いで『』として引きずり落とす対象候補だ、って」

「……あはっ」

マノンが笑った。心底おかしそうに肩を震わせる。

「シシリア司祭は、本当に……有能な方です。わたくしなどを権力者に据えるつもりは、最初からなかったのですね」

「そうね。不正は許さない。を監視するのがの役割。その信念をまっとうしようとしている聖職者よ」

だから、と付け加える。

「あなたがここでなにもしなければ、間違いなく、次期リベール伯はあなただったわ」

「そうですか」

マノンが、ゆっくりと鉄扇を構えた。

「後悔の理由になりませんね、そんなものは」

権力の座を告げられて、マノンは一拍の間もなく拒否をした。戦う姿勢を取った彼女に、メノウは視線をきつくする。

「私に襲い掛かってきたのは、母親の復讐？」

「ああ……ご存じだったのですね。てっきり、わたくしのことなど眼中にないものだとばかり」

「調べるわよ。共闘する相手のことくらいは。との因縁があるなら、なおさらね」

「共闘ですか」

マノンが、静かにほほ笑んだ。

「……はい。楽しかったですよ。メノウさんと一緒に親族の方たちを突き落とすのは」

「マノン。いまなら……私の一存で、不問にすることもできるわ」

油断なく構えながらも、メノウはマノンに投降を呼びかける。

「あなたの気持ちは、自然なものだもの。母親の仇をとりたいっていう衝動にかられたことを、必要以上には責めないわ」

「……お優しいですね、メノウさんは。どうしていまの立場にいらっしゃるのか、不思議なくらいです」

母の仇を前にした行動ならば、一度は見逃す。

譲歩を提示したメノウに対して、マノンは首を横に振った。

「ですが――そもそも、これは復讐では、ありません。わたくしが決めた、わたくしのための闘争です。だから戦ってください、メノウさん」

しゃん、と金属音を立てて扇を広げる。

引く様子を見せないマノンの態度に、メノウが苦虫を噛みつぶしたかのような顔になる。

「……ここで戦って、なんになるって言うの？」

「こうすれば、血筋に囚われたいまの自分から、脱出できるんです。だから難しく考えないでください、メノウさん。復讐なんて大層なものではなくて……これは、ええ、あれです」

広げた鉄扇で口元を隠し、マノンはおっとりとほほ笑む。

「ちょうど反抗期なんですよね、わたくし」

マノンが一歩下がって、メノウから距離を取る。

彼女の全身から、導力光の燐光が舞う。騎士ですらないの令嬢ではあるが、マノンはある程度の戦う術を修めていた。

母親の代わりに力を得ることを期待されていたため、幼少期のマノンは魔導の英才教育を受けていたのだ。

親族の期待に応える【カ】は持っていなかったが、それでもマノンは優秀な部類だった。そのまま習い続ければ、騎士になれただろうくらいには。

導力強化で身体機能を上げて、鉄扇の紋章魔導をいつでも発動できる体勢を保つ。

「反抗期だからに逆らおうなんて、正気？」

臨戦態勢のマノンを前にしながらも、メノウは短剣に触れようともしなかった。

「メノウさんは、少しばかりわたくしのことを勘違いしてらっしゃるようですね。わたくしは父のため、この町のため、のため、世界のためになろうと思ったことなど、一度としてありません」

マノンはリベール伯という地位が、いらないのではない。

リベール伯などという地位など、のしを付けて返してやりたいほどに願い下げなのだ。

「まして、リベール伯になった自分の一生など、想像するだけで身の毛がよだちます」

彼女は一度たりとも、リベール伯を継ぎたいなど思ったことはない。でありたいと望んだこともない。自分が継ぎたかったのは、父の権勢ではないのだ。かといって神官たちのようなになりたかったわけでも、のような日常を得たかったわけでもない。

その、どこにも属さない人になりたかった。

「わたくしは誰のためでもなく、誰の責任でもなく、わたくしのために行動したいだけです」

マノン・リペールという少女の存在の核は、この世界の人間にない。

異世界から来た母親にこそあるのだ。

「メノウさんにも、わかりませんか」

すっと流麗な動きでメノウに向けたのは、護身用の鉄扇だ。自宅にいる時ですら護身武器を手放さなかった理由は、彼女が誰一人として屋敷にいる人間を信用できなかったことにある。

マノンは満たされていない空虚な顔で最大の犯行理由を告げる。

「禁じられているものを、求めずにはいられない心が」

マノンとまったく正反対だが、この処刑人の少女にもあるはずだった。

だって。

あの、夜のような瞳をした少女を見る彼女の瞳は、あまりにも優しかった。

メノウという少女は――処刑人として禁じられているはずのものを、求めている。

「なに、を」

自覚していない柔らかな心。自分はアカリを守っているという自負。矛盾から生まれた隙を突かれて、メノウがわずかに動揺をさらした。

おそらく最初で、最後の隙だ。マノンは前に踏み込むと同時に、鉄扇に導力を流す。

『導力：接続――鉄扇・紋章――発動【風刃】』

振り抜いた鉄扇から、いくつもの風の刃が放たれた。

人に当たれば、五体をずたずたに切り裂く威力の紋章魔導だ。だが、向こうの動きのほうがはるかに早い。

『導力：接続――神官服・紋章―――発動【障壁】』

後手で動いたメノウが、【障壁】を発動させて風の刃を弾く。さらに、踏み込んで、一歩。発動させたままの【障壁】でマノンを押し込み鉄扇を弾き飛ばす。

「あ」

武器を失った声が口から漏れた。

腕を弾かれた衝撃で、マノンが態勢を崩す。ぴたりと喉元に短剣を突き付けられる。文句のつけようのないほどあっさりとした敗北だ。

だが処刑人の刃が、マノンを切り裂くことはなかった。

紋章魔導を発動させるための鉄扇を弾き飛ばされた。マノンは自分を完封したメノウへ泣き笑いの顔を向ける。

「殺しは、しないのですか？」

「殺すほどの罪じゃないわ」

死を覚悟して処刑人に挑んだマノンに素っ気なく告げられたのは、『お前は敵ですらない』という台詞だった。

メノウの短剣の切っ先は、喉元に突き付けられたまま動かない。

マノンとメノウでは、あまりにも差があった。

護身のために魔導を習ったのがマノンであり、戦うため殺すために鍛えられたのがメノウだ。

「ちょっと襲われたくらいで、いちいち殺し回ったりするほど野蛮人じゃないわよ。私が相手にするのは、もう取り返しがつかなくなった存在――禁忌だけよ」

「わたくしは禁忌ではない、と？」

「ええ。ただの犯罪者と禁忌には、明確な違いがあるもの」

メノウは処刑人だ。

なにをするまでもなくこの世界に存在すら許されないものが、禁忌だ。

だからこそ彼女は公に不正を裁く立場にいない。

人死にを出す可能性のある禁忌を、可能性の段階で処分する権限を与えられている。人を生贄に捧げて力を得る原罪概念、そして純粋概念を魂に宿す異世界人、あるいは人の手に余ると判断されている原色概念。存在そのものが人道に反している魔導や、多くの被害を出す可能性がある者や技術を人知れず抹消する。

処刑人とは、そういう存在でしかない。

だから、マノンを裁くのはの中でも裁判権を持つ異端審問官の仕事だ。

「償いなさい。あなたの罪を。そうしてやり直せばいいわ」

メノウがマノンの喉元から刃を引く。短剣を太もものホルダーに戻して、踵を返した。

この刃で、マノンを貫く必要はない。そう言わんばかりの態度だ。

メノウが口にしたまっとうな聖職者のような言葉を聞いて、情けをかけるかのような態度を前にして、くしゃりとマノンの顔がゆがむ。

「なにを、ですか」

マノンは喉を震わせる。

誰もかれもが、マノンに代償を求めた。お前が生まれたのは、純粋概念という【力】を求めたからだという。

マノンが育ったことに、見返りを要求した。

強大な力を持つ異世界人である『迷い人』の娘ならば、お前にも特別な力があるはずだ、と。

バカな話だ。マノンが母親の力を継ぐことはなかった。純粋概念とは魂に定着する力であって、肉体の要素とは違いひとかけらも遺伝することはない。

だから、マノンには、なにもなかった。

誰かに分け与えられるようなものは、なに一つ持ち合わせていなかった。なにかを生まれ持つことなく誕生したマノンに向かって、周囲の人々はなにも持っていないことを責め立てた。

どうしてお前は、もっと特別な人間ではなかったのだ、と。

錆びついて真っ黒になった、かつては期待だった感情の裏返しを聞かされるたびに、マノンの心には虚無が広がった。

「わたくしが償うべき罪とは、なんなのですか⁉　生まれたことを責められて、どうしろというのですか！　こんな人生をやり直して、なにになれるのですか‼️」  
「誰かの生まれを裁く罰なんて、ないわ」

マノンの慟哭を聞いて、メノウは静かに告げる。

「あなたは、自分がしたことだけ罪に問われる。……この世界に来た、というだけで理不尽に殺される人たちに比べて、まっとうな話じゃない」

「……は」

今度こそ、マノンの表情がひび割れた。

告げられた台詞の傲慢さに。彼女の態度の正しさに。まるで、清く正しい神官であるかのような立ち姿に。

マノンが求め続けていたものとあまりにも乖離した言葉を口にしたのが、『』であるという事実が、マノンを心底から打ち砕く。

――お前は、禁忌ではない。

言っていることはまるで違うのに、母親を殺されたあの時、そう言って立ち去った赤黒い髪をした神官といまのメノウの姿が重なった。

「あなたたちは、どこまで……人でなしなのですか？」

「悪いわね」

声を振り絞って震わせるマノンに、メノウが素っ気なく告げる。

「処刑人っていうのは、死にたいっていう破滅願望持ちを殺してあげるほど都合のいい存在じゃないの」

マノンの表情が消え去る。体が力を失い、ぺたんと地面に膝をつく。

メノウに冷たく見下ろされながらも、マノンは茫然と思考を回す。

なにも、得ることができなかった。

同時に、なにかを失うこともできなかった。

マノンの目から、涙がこぼれる。

「お父様……」

自分は、どうすればよかったのだろうか。メノウが立ち去っても、答えは出ない。せめて、もう少し戦えれば。あるいは、もっと他人を巻き込めるほどの技能があれば。

禁忌と呼ばれる存在になれさえすれば、メノウという処刑人は自分に刃を届けて、胸の内に広がる虚無を埋めてくれたかもしれない。

だが、そんな事件を起こせる力すら、マノンにはなかったのだ。

「お母様……」

力ない声を遠くに響かせる。

自分が、母親によく似てしまったということは自覚している。異世界に来たという不運に見舞われて、そのまま流されて生きて、マノンを生み育て、禁忌だと殺されてしまった母に。

なのに、自分は母のような禁忌には、なれなかった。

「わたくしは……どうすればよかったのでしょうか？」

虚ろな問いは満たされることなく、崩れ落ちたマノンはしばらくしてやってきた騎士たちに拘束され、抵抗することなくシシリアに引き渡された。

なにも成せなかった少女の事件は、そうして多くの人に知られることすらなく終わったのだ。

今度こそ、リベールでの仕事は無事に終わった。

あのあとに、リベール伯の病死は改めて確認された。マノンは異端審問官の沙汰を待っている。

すべてが終わった後、メノウは報告のため教会を訪れていた。

「ありがとう、メノウさん。あなたには嫌な役を押し付けてしまったわね」

「いえ。お気になさらないでください。……マノン・リベールの処遇は、どうなりますか？」

「あなたに襲い掛かったという罪はあるけれども、実刑に至るかはわからないわ」

「それは、そうですね」

メノウは頷く。

実際問題、マノンがやった行いは大したことではない。立場上見逃すわけにもいかなかったから突き出したが、メノウの個人的な感情としては同情しているくらいだ。それだけ彼女は屈折した環境で生まれ育っていた。

『迷い人』との間に生まれ、親族からは力を求められた。ありもしないものを要求され続けた彼女の鬱屈が噴出したのが今回の事件の要因だ。

「ただ──大分、気力を失っているように見えたわね。リペール伯という大役はこなせないでしょう。誰か、見繕わなければなりませんね」

「そう、ですか」

「あなたが気にすることではないわ、メノウさん。すべてはこの町の問題です」

シシリアの言う通りだ。メノウがどうこうできる立場ではない。処刑人は汚れ仕事の執行者だ。政治的な領域には関与できない。

自分が捕らえた相手のケアなど、まったくのお門違いだ。

「それよりも、朗報──と言っていいのかわからないのだけれども、あなたに伝えることがあるわ」

「なんでしょうか」

「聖地からの指令よ」

「え？」

予想だにしなかった言葉に、メノウの思考が停止する。

「指令、ですか？　聖地から？」

「あなたの連れている異世界人の危険性を鑑みて『塩の剣』の使用許可が下りたわ」

衝撃的な内容に、幼い頃の記憶がフラッシュバックする。

一つの大陸を溶かした、一本の剣。

四大に数えられながらも、意思なき道具として残っているがゆえに、の本拠地といえる『聖地』の管理下にあり、人目にさらされることすらない禁忌。おそらく教会が保有する中でももっとも悍ましい武器の使用許可が、たった一人を殺すために下りたという。

いま聞かされるまで、メノウの立場では使おうという発想がまず浮かばなかったほど厳重に管理されているのが、『塩の剣』だ。

「それは、が？」

「いいえ」

否定したシシリアの声には戸惑いとためらいがあった。アカリの危険性が高いと判断された証拠だが、『塩の剣』の使用が許されるほどだとはシシリアも考えていなかったのだろう。さらに、その判断を下した人物の名前は、指令を受け取った彼女本人ですら信じられないような相手だった。

「これは……聖地の大司教、エルカミ猊下直々に発令された任務よ」

立て続けに伝えられた予想外。聖地の大司教が出て来るほどアカリというイレギュラーの問題が大きいのだと聞かされて、メノウは今度こそ言葉を失った。

「あ、メノウちゃん」

短い挨拶をかわして教会から出ると、アカリがメノウを迎えた。ばたばたと足音を立てて近づいてくる。

「夜会はどうだった？　ご飯おいしかったんじゃない？」

「こ、怖かったですっ。味なんてわかんないくらいに！」

メノウの軽口に対する返答には、ちょっぴり責める気配があった。見慣れない場所に一人で放りこまれたことに恨みがましい感情がこもっていた。

「でも、そろそろ出発だっけ。夜会とかはともかく……この町は、のんびりしたところだったね」

メノウは、とっさの返答に窮した。

アカリの視点からでは、その通りだ。彼女はこの町で平和に過ごした。ホテルの一室で寝泊まりし、メノウと市場での買い物をして、リベール城での夜会に参加した。おおよそ平和で、旅のいい思い出だけが残る町ですらあるはずだ。

マノン・リベールという少女が己の人生をかけてに反旗を翻したことなど、アカリが知る由もない。

マノンの母親が異世界人で、アカリと同郷であり、夜会でアカリを目にすることでなにか思いのタガが外れるようなことがあったとしても。

アカリには、徹頭徹尾なんの関係もない事件だ。

そして、この町にいる間にアカリの処刑方法が決まったことなど、なおさら彼女が知るはずもなかった。

「そうね」

だから、メノウは複雑な心中を押し殺す。

いくつもの感情が重なり合った混沌としている心情の中に、アカリの平和を守り通したという事実に対する不思議な達成感があった。

殺すために、守っている。守っているという事実に、自負が生まれる。

守り、連れて行くのだ。

その矛盾が積み重なっていくことの自覚が、いまのメノウにはない。

「安心しなさい、アカリ。旅慣れた私がいれば、サポートはばっちりだから！」

メノウはアカリを安心させようと手を伸ばす。だが、触れる寸前にアカリが肩をびくっと震わせた。

「――あ」

その仕草に、メノウは自分でも意外なほどにショックを受けた。

メノウの手が宙をさまよう。導力接続をした時の痛みが原因でメノウと触れることを脊髄反射レベルで怖がっているのだと思い至ったが、いまさら気がついても遅かった。

差し出した手を引っ込めたメノウは、から笑いを浮かべる。

「あ、あはは……ごめんなさい、アカリ。ちょっとなれなれしくし過ぎた――」

固まった空気をごまかそうとしていたメノウの言葉を止めたのは、下げた手に触れた感触だった。

アカリのほうから手を伸ばして、メノウの手を取っていた。勇気を出して痛みのトラウマを乗り越えたのだと一目でわかる表情で、アカリはぎゅっとメノウの手を握りしめて視線を合わせる。

「た、頼りにしてます、メノウちゃん」

「……ええ！」

メノウが、今度こそ笑った。

演技でもなく、愛想笑いでも、ただ嬉しかったからという、年頃の少女にとって当たり前すぎる笑顔をアカリに向ける。

「頼りにしてね、アカリ。私は──清く正しく強い神官だもの！」

二人は友達というには少し離れた距離感で、それでも一緒に手をつないでリベールから出発した。

向かう先は、遠く、西の果てだ。

そこで逃れようもない残酷な結末が待っていることも知らず。

彼女が彼女とやり直すための一度目の旅は進んでいく。

＊

「うん。記憶の確認は大丈夫かな」

自分の記憶を整理したアカリは、そっと目を開ける。

記憶のあるアカリと記憶を封印したアカリ。その二つは正確に言えば、二重人格というわけではない。同一の人格であり、何度も繰り返した記憶を封じ込めたら普段のアカリになるというだけである。趣味嗜好や思考パターンに大きな変化はない。

──性格が変わるくらい、記憶が消えているでしょう？

ふと、港町リベールで聞いた小さな怪物の言葉が想起された。

通り過ぎたばかりのリベールでの出来事を思い出していたのだが、今回とはあまりにも違いすぎて参考にはならなかった。

『』。

霧の封印から抜け出した怪物は、無邪気にアカリの周回前提を覆した。

「もう……あんまり、時間がない」

もはやアカリが世界ごと回帰できる回数は、あと一回、あるかないかだろう。何度も世界の時間を巻き戻してグリザリカ王国から始まる三か月をやり直した結果、アカリは純粋概念の酷使で多くの記憶を失った。

その影響で、確かにアカリの性格は日本にいた時から変わったかもしれない。

当然だ。日本にいた頃の記憶を、ほとんど失っているのだから。

人見知りをして、頼みごとを断れなくて、浅い態度で周囲に合わせることしかできない。

そんな人間だった。

だから、昔から思っていた。

変わりたい、と。

「わたしは……こんな風に、なりたかったんだもん」

友達に、ちゃんと大好きだと言える人間になりたかった。うつむいているばかりではなく、顔を上げて目を合わせて、臆面もなく思いを告げたかった。

後悔しているのだ。

最初の時。召喚されてから、このリベールに来るまで。

まだ意気地なしだった、この世界に来たばかりの自分が、アカリは大嫌いでしょうがなかった。

「……はあ」

まだ意気地なしだった時の自分を思い出しながら、アカリは指鉄砲を自分のこめかみに突き付ける。

特に最初の旅。

メノウに迷惑をかけてばかりで、なんの助けにもならなかった自分。

どうしてあんな自分がいながらも、自分たちは『塩の剣』までたどり着けたのか。それこそ運命の導きだとしか思えない。

「だから――今度こそ」

『導力：接続――不正定着・純粋概念【時】――発動【回帰：記憶・魂・精神】』

もう、失敗はしない。強い決意を込めて、アカリは自分が発動させた魔導で頭を打ち抜いた。

自ら放った導力光が消え去った後、アカリはぱちくりと目をしばたたかせる。

「ふえ？」

きょろり、と周囲を見渡す。記憶が飛んでいる。首をひねりながら、アカリはそれがおかしいことだと考えることはせずにカチューシャを着ける。

そのタイミングで、哨戒に出ていたメノウが戻っていた。

「特に危険はないみたいだから、そろそろ行くわよ……って、どうしたの、アカリ？」

「ううん、なんでもない！」

ぼうっとしているアカリを不審に思ったのか、メノウが問いかけて来る。

アカリはうつむくこともなく、声を詰まらせることもなく、自分の気持ちをためらうことなく声にする。

「メノウちゃんと一緒にいられて嬉しいなって、改めて思ってたの」

「え？　なに？　面倒なこと言い始めたわね、いきなり。お金ならないわよ」

「面倒ってなに⁉」

屈託なく、遠慮なくメノウと言葉を交わす。

「それにメノウちゃんが貧乏なんて知ってるもん。甲斐性なしのメノウちゃんも大好きだから、心配しないでね！」

「清貧よ。私は清く正しく、強い神官だもの」

準備を終えたアカリは、立ち上がる。

記憶にはなくとも、今度こそメノウを助けるという目的は揺るがせず。

それ以外に、なにもいらないという決意を魂の奥底に秘めたまま。

「それじゃ、メノウちゃん」

「なにかしら、アカリ」

「目的地に向かって――しゅっぱーつッ、進行！」

アカリは元気いっぱいに手を振り上げて、メノウとともに歩き出した。